〔論　文〕

女子学生はテレビドラマに何を求めているのか

What do the female students expect from a TV drama?

狩　谷　　新
Kariya Shin

近年、テレビドラマの視聴率の低下は、民法テレビ局の経済的基盤を揺るがしかねない程、深刻な状態にある。現在、テレビ朝日の後塵を拝し、テレビ東京に抜かれることもあるＴＢＳが、1972年、水前寺清子主演のドラマ「ありがとう」第２シリーズ（看護婦編）で、56.3％（ビデオリサーチ調べ関東地区）という視聴率を記録したことは、最早伝説である。1977年９月26日以降のドラマ高世帯視聴率番組（ビデオリサーチ調べhttp://www.videor.co.jp/data/ratedata/junre/01drama.htm/jidai）を見ると、1983年３月放送の「積み木くずし・親と子の200日戦争・最終回（45.3）が最高で、21世紀に入ってからは一般ドラマの最低33.7％を超えたものは全42作品中、２作（2003年Good Luck最終回ＴＢＳ37.6％、2001年ＨＥＲＯ　フジテレビ36.8％）のみである。20％台で見ても、全37作品中、６作品で、このデータは2009年１月30日付けのものであるから、2008年には、１本もなかったことになる。

一方、年間高世帯視聴率30番組の平均をＮＨＫを除いた形で見てみると、1995年から2000年までの６年間の平均が30.9％であるのに対して、2001年から2008年までの８年間の平均が29.9％、となる。しかし2002年には、日韓合同主催のサッカーワールドカップがあり、この年だけ特殊なことを考慮して、これを省いた平均は、28.6％であり、２ポイント以上の下落が見られる。関東地区の総世帯数は、17,581,000世帯（ビデオリサーチhttp://www.videor.co.jp/rating/wh/13.htm）であり、２％は、約33万世帯、４歳以上の人口では、81万人が、減ったことになる。

このように明らかな凋落傾向を見せているテレビメディアにあって、限定された視聴者の間で異常な盛り上がりを見せたドラマがある。フジテレビ系列で、2008年４月から11回に亘って放送された「ラストフレンズ」である。

この番組に関し行われた、大分の２大学での調査から、延べ600名の女子学生の視聴率が70％を超える（Yi Yeji学位論文「ドラマ「ラストフレンズ」から見るテレビメディアの凋落について女子大学生400人のアンケートと質的調査に基づく考察」　立命館アジア太平洋大学　2008）という結果が出た。本稿では、何が女子学生を惹きつけたのかを考察し、彼らが置かれている現状を分析するとともに、エンターテインメントであるはずのドラマが現代社会においてどのような役割を担っているのかを探っていく。

１．青春ドラマの軌跡

1965年10月、日本テレビは日曜８時の枠で、以後15年間続くシリーズをスタートさせた。第一作『青春とはなんだ』、原作は石原慎太郎、アメリカ帰りの熱血教師、夏木陽介がスポーツを通じて高校生たちを導いていくスタイルは、二代目竜雷太にも引き継がれ、３年連続、40回のシリーズが続く。この時期は1947年生まれの団塊世代が、18歳から20歳までの期間と重なっており、それ以降２年間は、10回、11回で終了している。５年目の70年、森田健作が剣道部主将として登場、初めて教師ではなく高校生が主人公となる。49年生まれの森田は団塊に組み込まれる世代である。翌年、村野武範（45年生まれ）が教師として登場、こちらも１年間続くシリーズとなる。シリーズはその二年後の70年、51年生まれの中村雅俊を迎え、就職を控えた大学生が主人公となるものに路線変更して三度目のヒットとなり、一年間続く。当時は、世帯視聴率しか得ることができなかったが、団塊世代との関係を考えれば、この青春シリーズを支えていたのが、同世代の若者であったことは容易に想像できるだろう。現在、50代から60代前半の日本人なら、一度はこのシリーズに触れた経験を持っている筈である。

同じようなテーマでヒット作を探ると次に出てくるのが、９年後の84年ＴＢＳが制作した「スクール☆ウォーズ　泣き虫先生の７年戦争」だろう。これは実話のドラマ化であり、団塊ジュニアが14歳という思春期にヒットしている。このジャンルは、以後、メガヒットが生まれず、24年ぶりにヒットしたのが2008年ＴＢＳ制作の「ルーキーズ」である。

この青春熱血ものともいえるシリーズとは別に、悩み多き若者を扱ったドラマの系列があり、草分け的な「若者たち」（フジテレビ1966年）から、「ふぞろいな林檎たち」（ＴＢＳ　83年）「高校教師」（ＴＢＳ　93年）「ひとつ屋根の下」（フジテレビ　93年）「未成年」（ＴＢＳ　95年）と面々とヒットが続く。年代的に見ると、団塊ジュニアがこの系列を支えており、「若さ」を「明るさ」と捉えていた団塊との間にくっきりとした違いが見てとれる。

団塊世代における「若者たち」が団塊ジュニアにおける「スクール☆ウォーズ」とみれば違いが鮮明になるかもしれない。全体としてみると、団塊時代のドラマの多数が「陽」であるのに対して団塊ジュニア世代では「陰」が強い。

団塊世代の一部が、「君の行く道は果てしなく遠い（藤田敏雄作詞佐藤勝作曲）」と考えていたのに対して、団塊ジュニアの中には「泣きじゃくる教師」を求めていた者がいるのだ。しかし、この部分に踏み込むことは本稿の主旨ではない。強調したいのは、支持する視聴者数が同質で、数が多い場合、ヒット番組の性格が簡明化する点にある。

団塊・団塊ジュニアという二つの世代の視聴者は求めている答えを「陽」にしろ「陰」にしろ、ストレートに受け取っていた。

そしてこの二つの塊は、圧倒的な数によって、日本全体が彼らと同じ答えを求めているかのような錯覚を生み出したのではないだろうか。

890万人と言われる団塊世代、790万人の団塊ジュニアは、総人口１億2770万に比べれば、小さく見えるかも知れないが、22歳から65歳までの就業人口7,471万人（総務省国勢調査報告平成17年）に比べればどちらも10％を超えており、彼らの意向が日本全体の意向と考えられる可能性は極めて高いものであろう。

彼らの10％強が同じ音楽を支持すれば、ミリオンセラーは簡単に達成される。これは団塊世代が熱狂したグループサウンズのレコード売り上げを見れば一目遼善である。

青春ドラマブームが起きているからといって、日本人全体が思春期であったわけではない。ブームは数の力による。逆に言えば、現在の大学生（推定250万人）がブームを引きおこす可能性は極めて低く、彼らの心情が日本全部を覆い尽くすこともない。それゆえにヒットドラマを捉え、彼らが何を考え、何に悩んでいるのかを見るのは難しい。だが、彼らの世代から明らかに多くの支持を受けたドラマが「ラスト・フレンズ」（フジテレビ2008年オリジナル脚本浅野妙子）だった。

２．前哨戦としての「のだめカンタービレ」

フジテレビは、2006年10月から、月曜９時のドラマとして、二ノ宮友子原作の漫画「のだめカンタービレ」をドラマ化、平均視聴率18.8％、最終話21.7％を稼ぎ出している。音楽大学に通う学生たちの日常を綴った分類的にはラブコメ（恋愛を主題にしたコメディ）に属するものだが、原作よりも明らかにリアリティのあるキャスティングが功を奏し、2008年には、ヨーロッパを舞台にしたスペシャルが、2009年には最終章と称した映画の製作まで行われるヒット作となった。

一般的にコミックを原作とする場合、元の絵柄が優れていると確立されたキャラクターと演じる役者の個性とに違和感があり、さいとうたかを氏の「ゴルゴ13」の実写がことごとく失敗したことからもわかるように、良い結果は生まれない。その点、二ノ宮氏の絵は、そこまで際立ってアピールするものではなかった。原作の人気は、音楽大学という特殊な世界に生きる学生たちの日常にスポットを当て、エピソードを積み重ねていったところにあり、主人公を演じた上野樹里を筆頭に、瑛太、水川あさみ等の個性が話を膨らませ、実際に優れたクラシック音楽をドラマ内で演奏する（実際にはプロが演奏）ことによって、娯楽作品として一級品になったと考えられる。前段で触れた通り、同年代の男女のドラマは、同世代の支持を受けることが多い。

例えば、現在、静かにヒット作が生まれているのが、いわゆる「昼ドラ」といわれるジャンルで、その視聴者の多くが、主婦となった団塊ジュニアであることからも分かるし、団塊ジュニアのシンボル的存在として、宝塚出身の天海祐希の人気が高いことからもそれ以外の世代の嗜好が読み取りにくくなっている。そんな中でヒットした「のだめ」は、戦後生まれの多くの女性が習っていたピアノをキィアイテムとして持つドラマである。同じようなテイストのドラマで比較し得るのは就活学生と聾唖のバイオリニストが主人公の「オレンジデイズ」（ＴＢＳ2004年）だろう。視聴率的には健闘（平均17.2％、最終話23％）しており、それなりの評価を受けてはいるが、その後の展開は全くない。当時者である学生以外の層に訴える部分が少なかったことと、障害者モノに分類されたことが少なからず影響しているとみられる。

更に分析すれば、「オレンジデイズ」が妻夫木聡演じる男子学生がメインであるのに対して、「のだめ」は上野樹里扮する女子学生が主人公、という違いが大きいだろう。二人は、大学に通っていなければ社会人という年齢に達している半社会人である。同じように不安定な境遇だが、上野が、憧れの異性（玉木宏）への思いを素直に表現する一方で、妻

夫木は、相手（柴咲コウ）への包容力を持たない。ドラマの視聴者が主として女性であることを考えると、妻夫木の悩みは所詮、異性のものであり、母性本能をくすぐっても頼りにはならない。一方、柴咲に自己を投影するには、「美人で聾唖者だが音楽的才能は抜群」という設定では、差異が激しすぎたのだろう。愚かしくはあるが才能はあり、憎めない性格の上野に軍配が上がったと見るべきである。更に「のだめ」には、瑛太と水川が演じるカウンターパートが設定されていた。この４人はそれぞれ別々のカップルを構成しており、どちらかといえば瑛太と水川の関係の方がより現実的である。この設定によって、視聴者は、４人を安心して観察できるのであり、上野の時に非常識と思われる行動も容認してしまう。そして、その４人を演じる俳優それぞれに好意を持つ。視聴者は、元来我がままであり、設定上の憎まれ役を憎悪するのは自由で、役柄と俳優を混同する傾向にあるのは、今も昔も変わらない。デビュー作のスイングガールズ以来の当たり役となった上野は勿論、瑛太も水川も此処で得た支持には大きなものがあったといえるだろう。この３人が、２年後に再び顔を合わせたのが「ラスト・フレンズ」である。

ラストフレンズは青春群像劇である。前記の３人に、映画「世界の中心で愛を叫ぶ」（東宝2004年）で注目を浴びた長澤まさみとジャニーズ所属の錦戸亮を加え、現在、若者が日常的に遭遇する苦難の数々を盛り込んだ内容になっている。

その注目度も特筆に価する。グーグルで「ラストフレンズ　ドラマ」で検索すると、関連項目は2009年11月現在、およそ340万件上がるのに対し、「のだめ」は、285万件。共に終了している番組だが、「のだめ」が、12月に映画化を控えていることを考えるとこの数字の多さは特異であろう。因みにＮＨＫの「天地人」が164万件である。

３．ラストフレンズ　あらすじ

前記に「あらすじ」というキィワードを足すと、ヒット数は36万件になるのだが、以下はその中の代表的なものから抜粋した（新ドラマナビ　ラスト・フレンズhttp：//over.moo.jp/lastfriends/）

○　第１話「誰にも言えない悩みＤＶ、妊娠、禁断愛」

職場ではイジメられて、家庭では母親から邪険におもわれてきた美知留（長澤まさみ）は、唯一の救いである彼氏の宗佑（錦戸亮）に誘われて同棲を開始。そんなある日、美知留は中学校時代の同級生・瑠可（上野樹里）と再会する。瑠可はシェアハウスで友人と共同生活を送っていた。ちょっとしたことがキッカケで瑠可と出会ったタケル（瑛太）もそこに移り住むことを決意。そんな頃、美知留は瑠可からのメールを男からだと勘違いした宗佑から激しい暴力を受けていた。

○第２話「命がけの秘密」

宗佑に交友関係まで深く拘束をうける美知留。そんな中、タケル（瑛太）が美知留の美容室にやってきて、瑠可が出場するモトクロスの試合にきてほしいとお願いする。なんとか宗佑の許しを得て試合の応援にいくことができた美知留だが、瑠可が試合中にケガをしてしまい看護に立ち会うことに。

そこに宗佑が…。やさしそうな彼氏を演出し挨拶を交わした宗佑と瑠可だったが、病室を出たあと美知留に暴力を振るおうとする宗佑を瑠可が目撃してしまう。

〇第３話「命を削る想い」

体を挺して美知留を守った瑠可だったが、そんな姿にますます宗佑は警戒心を抱く。

ＤＶ（ドメスティック・バイオレンズ）を受けていることを知った瑠可は、美知留に詳しい事情を聞こうとするが、美知留は宗佑をかばってしまう。その後、がんばりを認められた美知留は店長に仕事を増やしてもらえることになるが、宗佑は猛反対する。

そのころタケルは、瑠可とエリがいるシェアハウスに引っ越すことを決意。

〇第４話「引き裂かれた絆」

美知留は宗佑の暴力に耐えられなくなり家を出た。瑠可は美知留がＤＶをうけていたことを聞き、宗佑としばらく距離をおくことをすすめ、シェアハウスにかくまう。

しかし、美知留の携帯の留守電には宗佑から謝罪の言葉が…。それを聞いて帰るかどうか心が動く。そんな中、宗佑は美知留の居場所をつかもうと瑠可を尾行して居場所を突き止めてしまう…。

〇第５話「衝撃の一夜」

宗佑への思いを断ち切ることができなかった美知留だったが、我慢できる人間にならないと一緒に住むことはできないと告げ、瑠可たちのいるシェアハウスで暮らすことを決意する。美容室に戻り、仕事に復帰できた美知留だったが、瑠可はそんな彼女を心配しながらも見守ることしかできず思い悩んでいた。その夜、瑠可の実家で食事会がおこなわれることになり、タケルと美知留を招待。瑠可の実家に一泊した美知留は、そこで瑠可には何年間も片思いの人がいることを知る。

その後、宗佑から連絡がこなくなった美知留は彼が心配になり職場へ連絡してみると、ずっと休んでいることを知る…。

〇第６話「命がけの逃避行」

美知留は宗助の元に戻った。ショックで無理に明るく振舞っている瑠可の気持ちを察したタケルは美知留のところへ向かう。そのころ美知留は宗助に行動を監視されており、逃げる気力もなくしていた。

それを見かねたタケルは再びシェアハウスへ美知留を連れ戻す。しかし複雑な心境の瑠可は、美知留を避ける…。

〇第７話「残酷な現実」

タケルは意を決して瑠可に告白した。しかし、他に好きな人がいると断られ、挙句には美知留のことを好きになってほしいと頼まれてしまった。

そんなとき、５人で遊園地に行くことになった。チケットが１枚余っていたのでモトクロスの監督に彼氏のフリを頼み、みんなの前に連れていき突然の交際宣言。みんなが驚く中で、タケルだけは動揺を隠せないでいた。その後、あらためて歓迎会を開いてもらった美知留は、宗佑と別れる決意をして、彼の部屋に一人で向かった…。

〇第８話「最後の手紙」

自分を偽ってシェアハウスで皆と暮らすことが苦痛になってきた瑠可は、美知留たちに内緒でシェアハウスを出る用意をしていた。

一方でシェアハウスを訪れた直也（澁谷武尊）が、美知留あてに宗佑からあずかった手紙を置いていった。その手紙を読んだ瑠可とエリは、宗佑がケガをして入院していることを知ったが、瑠可は美知留にその手紙を見せようとはしなかった。

そんなとき、瑠可のパソコンを黙って借りたエリが、性同一性障害のホームページを目にして驚く。そして、エリはそのことをタケルに相談したが…。

〇第９話「君の命」

瑠可が出て行きしばらく経ち、遠征先で優勝した瑠可がひさしぶりにシェアハウスに顔を出しに戻ってきた。瑠可が出て行ってからギクシャクしていたエリたちだったが、瑠可のために開いた祝勝会で再び賑わいを見せた。

そんな中、タケルはみんなの気持ちを代弁して瑠可にシェアハウスに戻ってきてほしいと伝える。一方で、美知留は二人の親しげな様子に嫉妬を感じていた。

そんなとき、美知留の付き添いとして美知留の母親と会ったタケルは、宗佑の虐待のことを明かした。誠実なタケルに母親は心を開き、美知留もまたタケルへの好意を深めていった。

それを知った宗佑は…。

〇第10話「最終章・愛と死」

瑠可の性同一性障害のことが雑誌で報じられてしまった。タケルは美知留にも直接打ち明けるように瑠可を説得したが、美知留のことが好きな瑠可は傷つけたくないとそれを拒否。

しかし、美知留は二人の会話をたち聞きしてしまう…。

瑠可の気持ちを知ってしまっても応えることができない美知留は、シェアハウスを出て実家に戻ることに…。

〇　第11話「最終話　未来へ」

宗佑は自分の独占欲を制御できないことを理由に自殺。瑠可たちは、美知留が姿を消した本当の理由を知ってしまった。一方で、友彦（山崎樹範）の海外転勤が決まり、妻を連れて行くと知ったエリ（水川あさみ）はショックを受けるものの、明るく振舞い別れを告げた。

そんな中、美知留は母親の千夏（倍賞美津子）の古い知人であるシズエと再会。シズエの計らいもあり、旅館で働き出した美知留の妊娠が発覚した。宗佑の子供を産む決心をした美知留は、反対する千夏に自分の思いを告げ、産む決心は揺るがない。

行方のわからなくなった美知留のことを心配する瑠可の気持ちを察し、タケルは彼女を探し出し、生まれた赤ん坊との４人の生活が始まる。

一方で、エリは離婚した友彦と結婚。

最終話のまとめ方には、様々な問題があり、前出のYi氏の調査でも最終話に対する「不満」が指摘されている（満足していない76％）。この問題は後述する。まず考察すべきは、このドラマが支持を受けた理由だろう。筆者は、全体を通してのキィワードを「不安」と捉える。

４．現代の若者を捉える「不安」

未来を想像できる能力を持つ（少なくともそれを言葉にして、認識できる）人間にとっての根源的な不安は、「死」に対するものであろう。「すべての人間は死の前で平等である」と発言したのは小田実（1932～2007）だったと記憶するが、誰にでも確実に訪れる「死」は万人を不安にする要因ではあり、多くの宗教がその救済を訴えていることからも証明できるだろう。しかし、女子大生の多くが不安に思っているのは、平均寿命から見ても半世紀以上先に訪れる「死」ではない筈である。

平成2007年度の女子大生の就職率は、95.7％（厚生労働省発表平成20年５月16日）。

統計局によれば、1997年度の15歳以上の女性の有業者数は、27,495千人（総数54,907千人）その中で、家事が主な者は、8,693千人。2007年度の同調査でも、有業者数は27,803千人（総数57,019千人）家事が主なものは8,828千人となっている。男女で比べてみると、有業者の内、仕事が主なものの占める比率に大きな違い（男性96％、女性64.8％　2007年度）が見られる。（表１）

注目すべきは、10年間で女性の数が増えている（2,112千人増）ことに比べて、有業者数に変化がなく（308千人）、一方で、家事従事者の増減（135千人増）が少ないことだろう。これは、不況による失業者数の増大が主な原因で、専業主婦の数が10万人増えているのもその影響と見て取ることができる。

200万以上増えた女性の殆どが無業者（180万人増）となっているにも関わらず、その中での既婚者の数は66万人しか増えていない。女子学生の全てがこのような数字を把握しているとは考えられないが、彼女たちが自分の未来に対して「不安」を感じるのは極めて自然な行為だろう。

1955年から73年まで18年間続いた日本の高度経済成長期及びその後91年までの安定成長期においては、人生における類型的な安定モデルが存在した。一流の大学を出て、一流の会社に就職すれば、終身雇用性と年齢給に守られ、安泰な一生を送れる、というものである。男女雇用機会均等法が制定されたのは72年で、女性が、この安定路線のレールを走れたのは、主に後半の安

表１：統計局就業基本調査より抜粋

http：//www.stat.go.jp/data/guide/download/shugyou/index.htm

	1997年度	2007年度
男性（総数）	51,746	53,283
有業者	39,508	38,175
仕事が主	38,295	36,682
家事が主	296	407
無業者	6,815	15,108
家事が主	628	1,010
女性（総数）	54,907	57,019
有業者	27,495	27,803
仕事が主	17,914	18,004
家事が主	8,693	8,828
通学	586	681
無業者	27,412	29,216
家事が主	18,638	19,301
通学	3,876	3,212

千人

定成長期に限られる。しかも、規定路線を多くの先人が引いていた男性とは大きな差があり、日本総合研究所が09年３月に発表した「女性就業率向上の阻害要因分析」にもある通り、都市部では育児、地方では介護の不足から、既婚女性には厳しい就業環境が続いていることも事実である。キャリアウーマンともてはやされ、2005年に当選したいわゆる小泉チルドレンの中にもこの先駆的女性が含まれている。(片山さつき・82年大蔵省入省、佐藤ゆかり98年日興ソロモン・スミス・バーニー証券入社等)。しかし、彼女たちが現在の女子学生が目指すゴールなのだろうか？

毎日コミュニケーションズの調べによれば08年３月の文系４年生大学生の人気企業ランキングは、１位から、ＪＴＢ、資生堂、全日本空輸、三菱東京ＵＦＪ銀行、日本航空、みずほファイナンシャルグループ、三井住友銀行、トヨタ自動車、ベネッセコーポレーション、オリエンタルランドと続く。男子学生も含めてのリストだが、その多くが第三次産業であり、見事なほどＩＴ企業の名前が挙がってこない。一方で、日本で最高峰といわれる東京大学の卒業生の多くが就職せずに起業する傾向があるという（東京大学新聞2008年４月22号・特集　増える東大生の起業家)。

これは、安定的なルートの喪失を意味するのではないだろうか。先に上げた一流大学・一流企業というルートは、試験というプロセスさえ通過すれば誰にでも挑戦可能なルートであり、一流が存在すれば、それに連なるものとして、二流、三流を位置づけることができる。ヒエラルキーが明確な状態で、犯罪や暴力などの治安を乱す行為すら、このヒエラルキーに従って発生する。つまり、一流やそれに連なる二流社会までは、社会秩序を乱すような犯罪の発生率は低く、三流以下を注意していれば、極端な事件は発生しないのである。実際、97年に発生した14歳の中学生が引き起こした神戸連続児童殺傷事件のようなものは、バブル崩壊まで起こっていない、この一例をとってみても、経済成長期が如何に安定していたかが、理解できるだろう。深くは立ち入らないが、55年から91年まで、動機不明の殺人事件は、殆ど発生していないことは指摘しておきたい。

「不安ほどの極度の拷問は、どんな宗教裁判長でも用意しない」キルケゴール（1813～1855）が著書「不安の概念」で述べている通り、現在の学生が抱えている「描くことができない未来」への不安は相当なものなのではないだろうか？国民の生命と基本的人権を保障する国家が800兆円にも及ぶ借金を抱え、不沈艦とも例えられたトヨタ自動車が赤字を計上し、ナショナルフラッグキャリア、日本航空が倒産の憂き目に合っている現在、果たして、学生たちにどのような明るい未来像が描けるのだろうか？

筆者は、過去５年に亘って、立命館アジア太平洋大学において、１クラス240名を超える受講生に古典作品を舞台上演させる、という講義を実施してきた。受講生の多くが寄せてきた感想に「友達が増えた」というものがある。その中には、大教室の中で、常に一人ポツンと離れて座り、講義が終われば自宅でテレビゲームばかりしていた学生もいた。彼は、その演技力を発揮することで、多くの友人を得、将来像までも描き始めた。240名が協力して一つのプロジェクトを限られた時間の中でやり遂げることのプロセスを学ぶことがこの講義のテーマであり、常にそのことを念頭に指導しているつもりだが、このような「きっかけ」が無いと友人を増やすことができない、という状況をうまく理解できずにいたのも事実である。

国際学生の多いこの大学で、韓国人の女子学生から「日本の学生はどうして、私たちに声をかけてくれないのか？」と質問されたことがある。韓国では、女性から男性に話しかける習慣がないから、彼らがアプローチしない限り、知りあう機会がなく、彼女たちは、自分たちに魅力がないのだ、という結論に達していた。そのことを日本人男子学生に尋ねると、同じ大学に通っているだけでは、不十分なのだという。同じ講義を受けていても難しい。それ以上の共通点を探した上でないと、話しかけることができない、というのだ。これは、「拒絶」されることを極端に避けているのではないだろうか。「失恋」は大きな精神的な痛手となるかもしれない。しかし、挨拶をして、返事を返してもらえない、というのは「失恋」ではない。そんなことを恐れていたら、友人など一人もできないことになるし、ましてや恋人など夢の又夢である。一方で、簡単にステディな関係になり、実にあっさりと性的な関係にまで至るケースも多い。4学年合わせて6千人の学生が、山の上のキャンパスに閉じ込められたら、そうならない方が不思議なのかもしれない。しかし、この極端な二面性の陰に、彼らが根底に持つ「不安」があるのではないか、と考え始めた時期に放送されたのが「ラスト・フレンズ」だったのである。

異性に惹かれるのは本能的行為である。これは人間に限ったものではない。「種」を存続させるためには必要不可欠なものであり、個の寿命が尽きてもその「種」は継続的に存在する。生殖行為によって子孫を残すあらゆる生物が本能として繰り返しているものである。寧ろ、この行為に様々な理屈をつけ、言葉によって枷をつけているのは、人間だけかもしれない。近親相姦を禁じ、韓国では同性の婚姻も認めていない。最も力の強い雄が群れを支配し、その種を残そうとする日本猿の社会の単純さに比べれば、極めて複雑な状況である。現在多くの国では一夫一婦制が常識となっているが、イスラム圏では制限付きの一夫多妻制が生き続けており、日本を含む多くの先進国でも実質的には第二夫人を容認している。男女一組を結び付けている根本に何があるか、というテーマは、壮大過ぎて本稿では立ち入らないが、婚姻関係に至らない学生間の恋愛では、その不安定さ故に、ステディな関係が維持されているように見える。つまりひと組の男女がカップルを宣言すると、その瞬間に婚姻に近い関係が生まれ、第三者は、この関係が解消されるまで割り込むことを控えている。同時に複数の異性と関係を持つことは、「悪」とみなされ、これは実際の婚姻関係以上に非難される行為となっている。勿論、いわゆる三角関係的な問題は常に発生するが、これが問題となること自体が、結局二人で一組を目指していることに他ならない。つまり、当事者たちが、三角関係のままの安定を望んでいないのである。

5年間の観察の結果からみると、築かれたステディな関係は、卒業と同時に解消される傾向が強い。これが当初から計画されたものかどうかは推論の域を出ないが、男女双方が、関係を一時的なものと割り切っているケースが多いように見受けられる。また、在学中も平均2回程度は相手が変わるようであり、統計的な正確さは今後詳しい調査を必要とするが、筆者のゼミ生、のべ百人にインタビューした結果からは、男女ともに学生時代のパートナーとして見ているようである。そのような状態で性的な関係にまで発展することの是非は別にして、避妊に関する知識はかなり持っており、男女ともにこの点には注意を払っている。このようにみてくると性的行為は、愛情の確認とみるのが自然ではないだろうか。一方で、草食系男子が増えているという現実と重ね合わせると、行為そのものに対する欲

望よりも好意を容認する心情に、より大きなポイントがあるとみてもよいのではないだろうか。

新潟青陵大学大学院臨床心理学研究科碓井真史教授は、恋愛心理学における恋愛の四条件として、①性感情　②理想我に近い人　③損得勘定のない共感　④自己受容と自己開示を上げている（http: //www.n-seiryo.ac.jp/~usui/sigoto/kouenn/96.11.19.html）更に最初のプロセスとして、①相手の人間性に関心を示す。②相手に関心を示されら、自己開示する。その上で、相手の好感度を測るとしている。また、恋愛を育てるために、④かかわる回数を増やす。⑤好意を伝える行為（話し方・接し方・プレゼント等）を繰り返す。⑥相手の気持ちを知ろうとする、としている。どの時点で性的な関係が生じるかは、明記されていないが、常識的には、⑥までのプロセスを経た後に生じる行為でるべきではないだろうか。

生殖行為はどのような生物にとっても相手との信頼関係が必要不可欠なものである。つまり、最も無防備な状態で行われ、そこに至るまでには当事者同士の間に恋愛感情（強い信頼関係）が生まれていることが最低条件だろう。観察した学生を碓井教授の恋愛四条件に当てはめると、③の部分に疑問符が付く。別府市外からバスで40分ほどかかる山の上にあるキャンパスでは、異性のパートナーがいなければ孤独感に苛まれる。「寂しさから逃れる」ことを目的にすれば、これは、「損得勘定」と捉えられても仕方がない。この目的に男女の性差はなく、お互いに一種の「後ろめたさ」を持っていることが、プロセスの省略を招き、愛情の証として性的な関係を持っているのではないかと思えてならない。反論を恐れずに言えば、本来、お互いの十分な愛情を確かめた上でなされる筈の行為が、愛情を示す手段として用いられている、と考えた方が、筆者には、理解しやすいのである。一つの行為が目的である場合と手段である場合の差は大きい。目的である場合は、その行為に至り、それが維持されていることは双方の関係の安定を意味するが、手段であった場合には、異なる新たな目標が必要になってしまい、形が「恋愛」であるだけに「金銭的」な問題になることはない。「貞操」の問題になりそうだが、行為そのものが成果ではなく手段だから、本来、自然な形で無意識に守られる秩序ではなく、守るべき規則のようなものになって、お互いを縛り付けてしまう。これでは、安定を求めている筈が、不安定要素を増やしてしまっている。

客観的にみれば、最初のボタンを掛け違えているのだが、当事者たちは気付かない。ゲームと割り切っているわけでもないから、相手の行動が気になり、一喜一憂する。「切なさ」は恋愛のプロセスにおいて重要な要素であることに異論は無いだろうが、双方の愛情を確認できた時点でそのほとんどが解消されるべきものである。基順となるゴールが不確かであるから、いつまでも安定せず、小さな行き違いから関係が壊れてしまう。将来に対する「不安」に加え、最も身近で直近の問題である恋愛（そしてその本来の目的が、不安の解消にある筈の行為）にも「不安」を抱えているのが現在の若者なのではないだろうか。

5．ラスト・フレンズの人物設定

ドラマにおける人物設定をフリー百科事典ウイキペディアを参考に整理すると凡そ以下

のようになる。（http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A9%E3%82%B9%E3%83%88%E3%83%BB%E3%83%95%E3%83%AC%E3%83%B3%E3%82%BA#.E4.B8.BB.E8.A6.81.E4.BA.BA.E7.89.A9）。
〇藍田美知留（長澤まさみ）22歳。美容室「NiCHE」の元アシスタントで、後にタケルのアシスタントとなる。基本的には明るい性格でどんな事にも一生懸命な頑張り屋だが、優柔不断で他人に流されてしまうことも多い。決断力に乏しく、他人に頼ってばかりいることが多かった。自分を過小評価するところがありつつも、一度信じた相手をどこまでも信じ抜く優しさがあり、親友である瑠可の事を悪く言われるのをとても嫌っている。母子家庭に育ち、母親が連れ込む男との生活を嫌っていた為、住んでいたアパートの家賃を支払うことを条件に恋人の宗佑と暮らし始める。
〇岸本瑠可（上野樹里）22歳。全日本選手権の優勝を目指すモトクロスの選手で、シェアハウスの住人。美知留の中学・高校時代の同級生。口調や態度は男勝りでボーイッシュ。サバサバとした性格のしっかり者で、時には心優しい一面を見せる。外見で能力（モトクロスでの成績など）を判断されることを嫌い、一人前のレーサーとして見て欲しいと思っている。学生時代から大切に思っている美知留の事になると我を忘れることもあり、美知留が眠りながら涙を流しているところを見て、思わず彼女の唇にキスをしたこともある。自分が美知留に対して抱いているモノは「友情」ではないと分かっており、宗佑に嫉妬心を抱いている。実は性同一性障害という誰にも言えない悩みを抱えているが、敵対する宗佑には悩みを見抜かれている。
〇水島タケル（瑛太）22歳。シェアハウスの住人の一人。ヘアメイクアーティストの仕事の傍ら、夜はショットバー「Funny Fly」でバイトをしている。誰に対しても心優しく温和で人当たりが良い性格で、他人の表情・心情を敏感に感じ取る。自分のことよりも他人を優先する方で、ＤＶを受けた美知留を宗佑の元から連れ出すなど、時には大胆な行動に出ることもある。元々一人暮らしをしていたが、一方的にプレゼントを送りつけ、執拗に連絡を取ろうとする十歳離れた血の繋がりのない姉・優子の存在に嫌気がさし、また瑠可がいるからという理由でシェアハウスに引越してくる。優子から受けた性的暴力によるトラウマで、女性との接触に苦痛を感じるようになっている為、周りからはゲイだと思われており、遊園地で優子を見掛けた際にフラッシュバックを起こしている。セックス恐怖症に悩む中で瑠可に惹かれていく一方で、美知留に想いを寄せられる。瑠可が性同一性障害ということを知る一人。
〇滝川エリ（水川あさみ）22歳。契約制客室乗務員で、愛称はエリー。シェアハウスの住人。サバサバとした性格で、楽しいこと・面白いことが好きなムードメーカー。掴み所の無い個人主義者でもあり、言いたいことは本音をハッキリ言う。時には誰かを気遣ったり慰めたり、相談に乗るなど、他人を思う優しい一面を持つ。常に明るく振舞っているが、本当は誰よりも孤独や寂しさを感じやすい。好意を誰に対しても抱きやすい、恋多き女性でもある反面、「永遠の愛」というモノを信じておらずセックス依存症に陥っており、妻のいる友彦との関係によって寂しさを紛らせたり、酔った勢いでタケルにキスをしたこともある。
〇小倉友彦（山崎樹範）32歳前後。エリの会社の先輩。シェアハウスの住人たちにはオグ

リンと呼ばれている。妻（栄子：川村早織梨）が家に男を連れ込んだため、シェアハウスにやってくる。シェアハウスメンバーの中で最年長者ではあるが、自分から何か意見を言うことはあまり無く他人の意見やその場の空気に流されやすい。時にはお調子者的な空気が読めないような発言をすることもあり、基本的にシェアハウスの住人からは、からかわれる役回りである。

〇及川宗佑（錦戸亮（NEWS・関ジャニ∞））24歳。区役所の児童福祉課で働く美知留の恋人。幼少期に母親に捨てられ、その後親戚中をたらい回しにされた過去を持つ。頭脳明晰で誰に対しても優しく接する好青年。しかしその裏では、あまりにも美知留を思うがゆえでもある強い執着心と独占欲から、常に美知留を監視して行動を束縛し、また、自分の思いどおりにならない状況になると些細なことから美知留に対し暴力（ＤＶ）を振るうようになる。

主様登場人物６名の内、４人に病的な症状が設定されている。先天的な性同一性障害に悩む瑠可、セックス恐怖症のタケル、セックス依存症のエリ、ＤＶに走る宋佑。残る二人も、美知留は、保護者であることより女であることを優先する母を持ち、最年長の小倉も妻の浮気に悩んでいる。それぞれの現職から考えて、この六人の中で、４年制の大学を出ているのは、小倉と宗佑だけのようだ。美容師、モトクロス選手、ヘアメイクアーティスト、契約キャビンアテンダントは、専門学校卒業の可能性が高く、年齢こそ近いが、視聴者である女子大生とは、歩く道が大きく異なる設定ばかりともいえる。

Yi氏による立命館アジア太平洋大学でのアンケートでは、このドラマを見ていた400名の女子学生に六人の登場人物の対する興味がどの部分にあったかをを尋ねている（複数回答可）（表２）。

表２

藍田美知留（長澤まさみ）	岸本瑠可（上野樹里）	及川宗佑（錦戸亮）	水島タケル（瑛太）	滝川エリ（水川あさみ）	小倉友彦（山崎樹範）
性　格－36票	性　格－67票	性　格－56票	性　格－68票	性　格－53票	性　格－52票
容　姿－24票	容　姿－45票	容　姿－35票	容　姿－33票	容　姿－28票	容　姿－０票
生き方－26票	生き方－103票	生き方－25票	生き方－37票	生き方－20票	生き方－16票
悩　み－35票	悩　み－101票	悩　み－44票	悩　み－52票	悩　み－24票	悩　み－17票
その他－８票	その他－15票	その他－13票	その他－12票	その他－０票	その他－０票

注目すべきは「生き方」と「悩み」の二点で圧倒的に興味を持たれたのが、瑠可となっている点だろう。長澤・上野という二人の女優を起用したことからみてもこのドラマは、主人公が一人またはひと組の男女とは考えにくい。一応、メインとなるストーリーは、美知留（長澤）と宗佑（錦戸）との関係を描いているのだが、多くの女子大生は、設定上は自分に最も遠いと思われる瑠可（上野）に注目し、その性格にも容姿にも平均的に他の５人以上の興味を示している。彼女たちは、明らかに瑠可に何かを期待している。

瑠可と他の五人の違いは何か。母親の性に嫌悪感を抱く美知留、嫉妬が暴力に直結する

宗佑、性的不能のタケル、その逆に依存症のエリ（これはあくまでも設定上で、ドラマの中でこの部分が強調されたり、露出することはなかった）。そして、妻の浮気に悩みながら、結局は自分もエリと関係を持っている知彦。それぞれの設定を女子大生の日常に近づけることは可能だろうか。

母親の性への嫌悪感→親への不満

暴力的性格→誤った愛情表現もしくは稚拙な愛情表現

性的不能→女性化社会もしくは草食系男子

セックス依存症→誤った愛情表現もしくは稚拙な愛情表現

不倫・浮気→優柔不断、先延ばし

多少強引にみえるかもしれないが、元来ドラマは現実の一部を過激に表現することで成り立つことを考えれば、この程度に逆回転させることは許容範囲であろう。このように考えれば、彼らは、視聴者である女子大生の周りにいくらでも存在する「悩める若者」であることが分かる。しかし、瑠可の設定は、他の五人とは大きく異なっている。異能者と言い換えてもいいかもしれない。

古今東西、あらゆる物語に登場する主人公は、異能者である。英雄、偉人、正義漢である場合もあるし、逆に悪人、罪人、卑劣漢である場合もある。いずれにしても他の登場人物とは異なる能力を持っている。その意味で、瑠可は、女子大生の中で、主人公なのである。他の五人の「悩み」が、他者との関わりに原因がある（責任の所在がある程度明確である、もしくは、その責任を押し付けることのできる対象が存在する）のに対し、性同一性障害は、医学的にも解明不可能な現象である。瑠可は、その原因を誰に押し付けることもできない。この問題と正面から向き合い、解決の糸口を見つけ出そうともがいている彼女には、他の五人にはない「力」が感じられる。他の五人が「受動的」であるのに対して、瑠可だけは「能動的」であり、そこに視聴者である女子大生の興味を引く要素があるのだろう。これは、瑠可に引きずられるような形で、「力」を示すタケルの性格に女子大生が興味を示していることからも類推できる。彼女たちは、瑠可が抱える大きな悩みと他の五人の悩み（＝視聴者の悩み）を重ね合わせ、瑠可の行動が全てを解決することを期待したのではないだろうか。

先に揚げた「のだめカンタービレ」においても上野は異能者（天才的ピアニスト）であり、憧れの先輩との恋の成就を願って積極的に行動した。デビュー作の「スイング・ガールズ」でもリーダーとしての役割を果たしている。ドラマの視聴者も映画の観客も彼女の演じるキャラクターに素直に好意を抱き、応援してきた。「明るく」「元気で」「ちょっと抜けてる」キャラクターを自家薬籠中のものとしてきた。瑠可は、大きく異なっている。「力」を感じることはできるが、「明るく」はなく、あくまでも閉鎖的である。自分が好意を持っている相手（美知留）にふさわしくない相手であると認識している点では、宗佑と似ている面もある。どこまでもオリジナルキャラを越えられない長澤に比べ、幅のある演技力を持つ上野はその真価を発揮、瑠可に魂を吹き込み、視聴者に強烈なインパクトを与えた。そしてそれが設定以上の期待感をも生み出してしまったのである。

6．最終話への不満

前述の通り、400名の女子大生視聴者の76％は、最終話に失望した。Yi氏は、その理由も調査しているが、少数である満足した学生が理由に挙げたことは「ハッピーエンド」であったという。脅威であった宗佑は自殺し、美知留はその遺児を無事出産、瑠可とタケルとともにシェアハウスでの生活を再開する。エリは妻と離婚した知彦と結婚、その後、二人でシェアハウスに戻ってくる。昨今のドラマの最終回では珍しいものではない。きれいにまとまって、辻褄を合せました、という終わり方である。これで満足した視聴者は、このドラマにそれほどのめり込んでいなかった、ある意味「幸せな」学生生活を送っている、と考えることもできる。

しかし、76％は、不満だったのである。その理由の最大のものは「微妙」「曖昧」。これらの言葉も象徴的ともいえる。結論からいえば、彼女たちは答えを得られなかったのである。

美知留に思いを寄せる瑠可、その瑠可を女性として愛するタケル、そのタケルを好もしく思う美知留。という三角関係は、そのままの状態で安定する。この安定を握っている鍵が、宗佑の遺児である。この三角関係は、どの方向に進展しても、生殖行為が成り立たない。女性としての瑠可はタケルを受け入れないし、美知留に対してタケルは反応しない。瑠可が手術でもしない限り、美知留との間に子供が生まれることはない。この三人は、極端に小さな生殖不能社会を形成しており、その安定を願っている。この社会を存続させるためには、三人が同等に否定できる精子提供者（宗佑）が必要であり、これはかつて存在したというアマゾネス社会に似たようなものになっている。後から加わるエリと知彦は文字通り、付け足しである。これで「悩み」が解決したことにはならない。論じてきた「不安」の解消へのヒントすら見えない。宗佑に自殺させたことで、製作者は解答を放棄している、と言ってもいいかもしれない。

ここで、「ラスト・フレンド」を過去の優れたドラマと比較して、その質を問うことも可能だろう。しかし、それは本稿のテーマではないし、商業ベースのドラマ制作において、視聴者の興味を引き、それを最終回まで持続させ続けた、という点は評価されるべきである。問題は、このドラマに不満足だった多くの女子学生が、その「不安」を抱えたまま、今も生き続けていることにある。

バブル崩壊前後に生を受け、他者と異なることを強いられ、一方で「ゆとり」と言われながら、もう一方で「受験勉強」を強いられ、確かな未来も与えられず、肉体だけは成長してしまった彼女たちが抱えている「不安」は、尋常なものではない。その負のパワーが、言ってみれば「病人だらけ」のこのドラマに群れ集まったのである。

「若者は病んでいる」と断ずることは易しい。もし、するならば適切な処方箋を与えることが、年長者の義務であろう。もし彼女たちを「不安」に陥れているものが「社会」ならば、その社会に属している我々が、解決策を考慮すべきなのだ。

7．彼我の差

彼女たちは、我々と異なるのだろうか？人間の持つ能力の中で、筆者がかなり優れたものだと思うものがいくつかある。その中でも特筆すべきは「忘却力」だろう。誰にでも一

つや二つは「辛かった思い出」がある。しかし、それを繰り返し味わいたいと、思い出そうとはしない筈だ。寧ろ、その種の記憶は、心の奥に封じ込めている。筒井康隆氏の短編小説の一つに、主人公が通っていた高校を訪ねるシーンがある。そこで、彼は、かつての自分のロッカーを発見し、中を開けてしまう。そこにあったのは、思春期の怨念ともいえる恐ろしさに満ちたもの、という内容だった。過去を美化してしまうのは、人間の生きる術の一つなのだろう。

かつて私たちは、「不安」ではなかっただろうか？「死」というものを意識し、いずれ自分の存在が「無」に帰すことを「恐れ」なかっただろうか？その恐怖に、眠ることすらできず、震えていたことはなかっただろうか。

筆者の恐怖を和らげてくれたのは、数多くの娯楽作品だった。マンガ、小説、映画、テレビドラマ、アニメ、伝記、そこに登場する多くの人物が、「生きること」の素晴らしさを語り、同時に「死」への恐怖を和らげてくれた。勿論、両親や友人、教師や先輩からの影響も受けた。56年生まれの筆者は、高度経済成長の申し子であり、巷にモノが増えていくスピードと成長がシンクロしており、欲しい時に、欲しいモノが、欲しいだけ供給される、という一種理想的な状況で育った。少し前には、物不足で、後になると、過剰供給による選択の必要から、全員が同じものを手にすることができない状況となっている。そんな筆者でも「不安」になり、悩んでいたのだ。この悩みが、現代の学生の悩みと大きく異なるのだろうか？

「ラスト・フレンズ」の源流を辿れば「若者たち」にいきつく。「若者たち」のキィワードは「怒り」であり、「ラスト・フレンズ」のそれは「不安」と分類することもできる。しかし、この二つにつく形容詞は、同種なのではないだろうか？「ぶつけどころのない」「つかみきれない」要は「分からない」のである。

社会の進むスピードと自らの成長がシンクロしていることのメリットは数多くあるだろう。その流れを基準値とすることで、異なる流れを眺めることができる。供給不足の状態が「怒り」を生んだとすれば、「供給過剰」が「享楽」を生み、現在は、「価値を失ったモノが溢れている」状況であり、そこから「不安」が生み出されているのではないだろうか？繰り返すが「ラスト・フレンズ」は病んだドラマである。そこに啓蒙的な価値はない。しかし、そのドラマを求める者がいることを示す、という意味では「尺度」となる素材とすることはできる。

「供給不足」は健全な状態ではない。足りないものへの要求が満たされなければ、「怒り」が生じる。「供給過剰」は、不安を紛らわすが、これも健全とはいえず、「享楽」へ向かう。「価値のないものが溢れている」ことを認識させられた現代の若者は、ある意味健全からは一番遠い地平に追いやられているのかもしれない。彼らが時代背景的に、過去と異なる点がさらに一つあるとすれば、「答え」を求めることへの安易さではないだろうか？

行き過ぎた受験社会を押しとどめようとして、「全てのことに明確な解答があるわけではない」という事実を伝えようとすることが「ゆとり教育」の目的の一つだったかもしれない。そう言われる一方で、受験勉強を強いられ、携帯電話によって、いつでもどこでも誰とでも繋がれる、という「便利さ」を手に入れた現代の女子大生が学ぶべきことがある

とすれば、「答えが簡単に出ない問題がある」ことであり、そのことで「悩む」必要はない、ということなのではないだろうか。

女子学生は、自らの性に違和感を持ちながら、性転換手術を決意するまでには至っていない瑠可というキャラクターが、取り巻く「不安」に打ち勝つことを願って、チャンネルを合わせた。その根拠は、彼女の抱える問題が、他の五人より重いことにある。奇妙な論理に聞こえるかもしれないが、「人と異なること＝個性」という等号が成り立つならば、その度合いが大きければ個性が強い、ということになり、そのベクトルの方向性は問われていない。瑠可の場合、明らかにマイナス方向に向いているのだが、彼女たちはその大きさにだけ反応している。このドラマの中で、最も普通の人間として出てくる、三人の人物がいる。そのうちの二人は、瑠可の両親であり、もう一人は、瑠可の所属するモトクロスチームの監督である。この配置も、女子学生たちの瑠可への期待を高める役割を担っている。瑠可が変われば、全てうまく片付くのではないか？

最終話直前まで、ドラマは、その期待感を煽り続けている。最大の問題である宗佑が、生き続けていること（ライバルにして悪役）も重要な点だろう。ところが、宗佑は自ら命を絶ってしまう。それも自らの欠陥を正す手段として、死を選んでしまうのだ。瑠可はこの死に直接関与しない。これは、あまりにも安易な決着である。これでは「ＤＶ男性は全て死ね」と言っているようなものである。勿論、筆者もこの問題が安易に解決できるものだとは思っていない。しかし、仮にも物語作者であるならば、登場人物の相関関係の中から、解決策を導き出すべきであろう。サスペンスの巨匠と言われるアルフレッド・ヒッチコック監督の代表作「サイコ」には、愛すべき殺人者が登場するが、最後は、警察に捕えられ、多重人格障害として、治療を受けることになる。日本でも「ずっとあなたが好きだった」（ＴＢＳ1992）におけるマザコン男性は、最後に実母を刺殺しようとすることで、自らに決着をつけている。自己崩壊と自殺は、大きく異なる。生きてさえいれば、そこには、更生する可能性が残されているのだ。遺書を残した自殺に事件性はなく、宗佑に追悼の意を示す者もいない。小学生が、間違えた字を消しゴムで消してしまったようなものである。そして、残された五人の中で、成長したキャラクターは存在するのだろうか？

瑠可は性同一性障害を抱えたまま、タケルも同様で、美知留は、赤ん坊という宗佑と同じような身近な脅威（手のかかる、という意味においてだが）を抱えている。エリと知彦は、結婚という形こそ手に入れるが、心情的な関係に大きな変化はない（更にいえば、この二人に対する女子学生の興味は無視できるほど低い）。要は、振り出しに戻った形で、終わっているのである。勿論過去の多くの物語も振り出しに戻る。一時の脅威から平和な日常に戻るのである。五人と赤ん坊の暮らすシェアハウスの生活は、決して安定した日常ではない。

2008年、日本には、18歳から22歳までの女性がおよそ310万人（統計局推定）存在した。その多くが、「不安」に怯え、テレビドラマにしがみついていた。そして、未だに、答えを見つけられず、人知れず震えているのである。

参考文献・資料については、その都度本文に記した。